

世は末世に及ぶといへど。日月は北に落ちず。まだ散りもせぬ花筐を。あらけなやあらかねの上に落とし給いわば。天のとがめも忽ちに罰あたり給いて。我が如くなる狂気して。どもの物狂いと。いわれさせ給うな人にいわれさせ給うな。

照日の前かように申せば。

地謡かように申せば唯現なき花筐のかごととやおぼすらん。此君未だ其の頃は。皇子の御身をなれど。朝毎の御勤めに花を手向け礼拝し。南無や天照皇大神宮天長地久と唱えさせ給いつ。御手を合わせ給い御面影は身に添いて。忘れ形見までもなつかしや恋しや

照日の前陸奥のあさかの沼の花かつみ

地謡・照日の前かつ見し人を恋種の。惚ぶも

ぢ摺り誰故ぞ乱れ心は君の爲。ここに来てだにへだてある月の都は名のみして。袖にもうつされず又手にも取られず。唯いたずらに水の月を望む旅の如くにて叫びふして泣き居たり叫びふして泣き居たり

廷臣如何に狂女。宣旨にてあるぞ御車近ふまいりて。いかにも面白う狂うて舞い遊び候へ。観覧あるべきとの御事にてあるぞ急いで狂い候へ

照日の前嬉や借は及びなき。御影を拝みや申すべき。いざや狂わん諸共に御幸に狂うはやしこそ。

地謡御前をねう。袂なれ

照日の前忝なき御たとへなれどもいかなれば

漢王は

地謡・照日の前李夫人の御別れを嘆き給い。

朝政神さびて。夜のおとども徒に。唯思いの涙御衣の袂を濡らす

照日の前また李夫人は紅色の

地謡・照日の前花の粧い衰えて。しおるる露の存の上。ちりの鏡の影を恥ぢて。終に帝に見え給はずして去り給う

地謡・照日の前得日帝深く。嘆かせ給いつ。其の御形を甘泉殿の壁に写し我も書圖に立ちそひて。明け暮れ嘆き給いけり。されどもなかなか。御思いは増されども。物いかわす事なきを深く嘆き給えば。李少と申す太子のいとけなくまします。父帝に奏し給うよう

照日の前李夫人は本はこれ

地謡上界の壁妻。の仙女なり。一旦人間に。生るとは申せども終にもとの仙宮に帰りぬ。泰山府君にもうさく。李夫人の面影を。暫くここに招くべしとて。九華帳のうちにして。及魂香をたき給う。夜更け。人静まり。風すさまじく。月秋なるにそれかと思つ面影の。あるかなきかにかげろへば。猶いやましの思い草。葉末を結ぶ白露の。手にもたまらで程もなく唯いたずらに消えぬれば。

縹渺悠揚としてはまた。尋ぬべき方なし

世は末世になったと言つけれど、日はまだ落ちず花が散つてない花籠を乱暴にも地に落しなざるとは、天の咎めを忽ち受け 罰が当って、私のように 気が狂つて物狂いの仲間といわれるようなことをなさいますな。

人に物狂いと言われなさいますな。

照日の前「このように申せば

地謡「このように申しますと、ただ熱にうつなされて花籠の恨みを言っていると思つてしょう。この君もまだその頃は皇子の身分で、毎朝お勤めに花を供えて礼拝し「天照大神よ、転地の続くように、永久に守りたまえ」と唱えて御手を合わせなさいました。御面影は私の身に添いて、忘れ形見までもお懐かしく恋しいこと。

照日の前陸奥の安積の沼の花がつみ、

地謡・照日の前「かつ見る人に恋やわたらん」と詠まれたように、かつて逢つた人をずっと恋い続けて、古歌の「忍ぶもじずり誰ゆえに…」とわが心乱れは君のため、「この宮古に来てさえへだてある月の都とは名ばかりで、美しい君の姿をわが袖に移すこともできず、また手に取ることも出来ず、ただ水に映る月を望んで得られぬ猿のように 叫びを上げて泣き伏した。

廷臣狂女よ天皇の仰せであるぞ お車の近くによつていかにも面白く舞い狂いなさい。御覧になるとの事であるぞ 急いで舞い狂いなさい。

照日の前「嬉しいこと。それでは隔たつた身ながら 君のお姿を拝み申す事が出来るか。さあ、では舞い狂う事にしよう」とも「 行幸の前で離されて舞い狂うことぞ

地謡行列の御前を袂で払い清める事になるのだ。

照日の前忝い例え「ことであるけれど、どうということなのか。漢王武帝は、

地謡・照日の前「李夫人との別れを嘆き、政務を滞り、「寝所もむなしものとなって、ただ、物思いの涙が袂を濡らす。

照日の前「また李夫人は艶麗な色の

地謡・照日の前「花のようなお姿が衰えて、しおれ涙がちの床の上で、鏡に映る塵のような姿を恥、ついに帝に会わないでお亡くなりになったのでござります。

地謡・照日の前帝は深くお嘆きになって、李夫人のお姿を、甘泉殿の壁に描かせ、その絵に立ち添つて、明け暮れお嘆きになったのです。されどかえってその思いは増し、思いを交わす事ができないのを深くお嘆きになれば、李少と言つ幼い太子が、父武帝に奏上なさるには、

照日の前「李夫人はもともとほ、

地謡「天上界のあなた、華慈国の仙女である。たまたま人間に生れたのですが、結局もとの仙境に帰ってしまったと、それで、泰山府君にお願い申し上げ、李夫人のお姿をしばらくここに招くことにしよう」と、(帝)は美しい帳に囲まれた寝室の中で、反魂香をおたきになる。夜が更け人は寝静まり、風はすさまじく、月の照らす秋に、李夫人と思われる姿が有るか、ないかにちらちら見えたので、帝はなお思いが増した。葉末に結ぶ白露のように、手に取ることも出来ず、程なくむなしく消えてしまったので、広漠とした中ほんのりとゆっくりと消えていったので、また何時と尋ねる事が出来なかつたのである。